
essais ころみ New 2026年2月

2026年2月2日（月） 晴

今日は満月、時間は午前7時すぎだから早朝の西の空の月がほぼ満月。
外はまだ暗闇、きれいに撮れた。はや2月、日の出時間は6時台に入っ

— おさらい独習 「六十四卦」 — 25.无妄

「むぼう」、 无は無、妄は望。解説に、「こうしたいという期待や
予定、下心や手練手管を捨てて、なりゆきのまま身をゆだねること」。

つづけて、「老子の無為自然の道に近い」。また「思いかけない出来
事にぶつかっても、動揺したり、作為を働かせたりしないこと」。

その状況を静かに素直に受け入れることを説くけど、「それは単なる
消極さとは違う」、と強調。

「ひでりや洪水に見舞われても、黙々と大地と取り組んで離れない農
夫の心、苦しみに耐えて子を育てる母の態度である」。

ところで先の「手練手管」を辞書でひくと、「人をだますための巧み
な技や方法のこと」。

そして「无妄」について、宋の時代の学者は「至誠（きわめて誠実な
こと）真実」と説明しているそう。

原文、「无妄は天命に従う。それゆえ大いに伸び栄え、その道を変ら
ず守る者には万事順調である」。

もし、「策謀を弄してその道に反するならば、必ず災禍がふりかか

「大象」は、「聖王はその卦象をみて、時に順応して万物を養い育て
たのである」。

さて、これを現代におきかえ、身近なところで考えて、自業（じぎょ
う）があてあまるかと…

（事象） 自業（じぎょう）。『究めれば そこが 天職』、地道にこ
つこつと、自分ならではの仕事を究めれば、想う人生を全うする

(心得) 「自問をつづける。仕事でもプライベートでも、問題意識をもち、テーマを見出して、人の役に立てる」

(構え、パノラマ)

一、無心に進む。大勢にのみこまれず、余計なことは考えず、想うところを進む

二、淡々と究める。成否を考えず、富や名誉を求めず、ひたすら質仕事の質向上に努める

三、模倣者が現れる。巧みな宣伝効果で模倣者をオリジナルとみる人が多くなる

四、動じずマイペースを守る。これまでどおり務めを果たす

五、体調を崩す。休養・休息のサイン、気晴らし、リフレッシュになることをする

六、自然のなりゆきにまかせる。ジタバタせず、作為を施さず、究め続ける

以上、「无妄」のおさらい。原文の六爻はLYK流自業（じぎょう）へのエールのように感じた。なんとなくありがたい気持ちになった。

2026年2月5日（木） 箕面の勝尾寺へ

昨年末から決めていた勝尾寺参拝。おみくじが易経の六十四卦。立春の翌日の今日が空いていたので、朝一番で行った。

箕面萱野駅前から直行バスで約20分。始発の9時より30分はやく着いたが、すでに6名並んでいた、それも外国人。その後もぞくぞく。

平日の朝一番、ゆったりをした気分で行けるかと思ったら…。

目的はおみくじ。散策は5年ほど前に来たことがある。だからすぐ帰るつもりだった。しかし帰りのバスの始発は11時22分。

2時間も過ごせない。帰りは下り、歩くことに決めて、参拝に入った。順路どおりしかいけないので本堂まで少し時間がかかった。

道すがらのお堂、本堂で手は合わせた後、さて本堂前のおみくじの長いテント前へ。3つある係の真ん中へ。

係の女性が、笑みをうかべるほど、ちょっとしばらく無に徹する面持ちで、大きな樽に盛られた小さな達磨たちの中から一つをとった。

達磨さんの底におみくじが差し込まれている。ぬいた。おそろおそろ見た。なんと、2日に書いた25番「无妄」だった。

“こんなことがあるのか…”。「おさらい」で自分のことのつもりで書いたその卦をひくなんて、天の思し召しか。

何も余計なことはすることない、今のままやっていきなさい。天からそんな風に声をかけられた気がした。

大事な答をもらって、清々しい気持ちで帰りの順路をたどった。外へ出て、バス停をみることもなく、下山した。

晴々とした気分で歩いた。車は少ない、それでも注意しながら両手の軽いバックと小さな紙袋をふりふり、下った。

ただ、頭のすみに、そのうち誰かみかねて車に乗せてくれるかな、という思いも無くはなかった。

20分ぐらい歩いた頃、そろそろ足の疲れを感じだした時、右側に車が静かにとまった。運転席から女性が、「どうぞ、乗ってください」。

家へ帰るのに登っていたら、一人歩く女性、たぶん駅までだろうけど、まだずいぶんあるのに…。そう思って引き返してくれたと言う。

年齢は70代初めから半ば？ 通い慣れた道、運転がシャープ。見た目は飾りっ気はなく、普通。でも話し方がシャープ。

ひょっとしたら教師か何か、専門職だったかもしれない。話していて、返ってくる言葉に知性を感じた。

車内での会話は10分余り、最後の方で出た話は、最近の若い人たちの金満ぶりだった。

たまにデパートへいった時に、見た目には不釣り合いな高級ブランドブティックで買い物する若い者をみる。

「どこにそんなお金が…、ひょっとしたらきれいなお金ではないんじゃないかと…」。

時代がかわって、勤勉さが尊ばれなくなったというお話だった。そういう視点の方だった。

初対面でわずかな時間なのに、このまま分かれるのが惜しい気持ちになった。でも住所を尋ねるなんてことは相応しくない気がした。

お名前だけ教えてもらい、こちら名もって、降り際、握手をお願いした。喜んで手を出してくださった。

もし身近で知り合っていたら、たぶん、親しくなり、長い交流になる人だと思う。そうならないけど、共感、共鳴し合える人がどこかにいる。

それが確かであること、そういう世界をもっていること、それがしあわせな気持ちにさせる。

車を見送って、なんというか、今日は本当に特別な日になったと思った。たぶん、生涯わすれない。



